



北鎌倉台峯トラスト 北鎌倉の景観を後世に伝える基金



会報

2020年3月 NO.41



<ヤマザクラの花の下、ほぼ完成した管理棟 2020年3月撮影>

近づく開園

目次

■ 開園を待つ台峯緑地	2	■ 「緑の洞門」	9
■ 「会員の集い」開催報告	4	■ 鳥の名前よもやま噺⑥ キビタキ	10
■ 鎌倉市の蝶 浅野勝司さん	5	■ 活動記録 ほか	11
■ 「台峯を歩く会」と関連活動の報告	8	■ 台峯の周辺⑱ Hさんのこと	12

.....

開園を待つ台峯緑地

.....

●来年4月の全面開園を目指して

台峯緑地は、来年4月に供用開始(全面開園)となります。それに先立ち、今年の4月から部分開園が予定されております、“谷戸の池”から奥(南側)が一般公開され、管理棟(山ノ内配水池側)のトイレなどが使えるようになる見込みです。

●来年度の工事予定

基金でいつも歩いている区間の工事はほぼ終わりましたが、もう一箇所、施設の建設が予定されています。山崎小学校の隣接地(緑地の北端の辺縁部)の谷戸(“北大路魯山人”の料亭跡地)に道具小屋やトイレなどがある施設が作られます。

●整備工事後の様子

2月末の時点で、写真のように散策路の一部に手すりをつけられました(写真①)。散策路の水路沿いは転落の危険があるために、安全対策としてこのような工事がされています。



① 散策路の手すり

また、傾斜していた散策路も、平らにされ

て歩きやすくなっています。

散策路の途中で水路を横断する地点がありますが、横断地点にある古いコンクリート製ヒューム管を、新しい金属製のヒューム管に取り替えて土をおおいました(写真②)。結果として水路を安全に横断できるようになりました。



② 水路に設けられた新しいヒューム管

●“谷戸の池”の水抜きを試行しました

このたび2月26日に、鎌倉市公園課と鎌倉市緑化専門委員が“谷戸の池”の水抜きを試行し(写真③)、当基金理事も立ち会いましたので報告いたします。



③ 水門を開け、排水を始める

台峯緑地の最大の特徴は“ため池”があることです。森林だけでなく、ため池と周辺の湿地が存在することが自然を豊かにしています。池の水質管理のためには、池底にヘドロをためないために定期的な水抜きが



④ “谷戸の池”の水門



⑥ 水もれあると思われる部分

欠かせません。また水抜きで排出されるへドロから湿地や水路を守る配慮が必要です。そのため、水門(写真④)の調整はもちろん、湿地に新たな水路を設けて、湿地にへドロが流出しないように水流を導く工夫をしてみました(写真⑤)。また、前回の会報でもお伝えしましたように、工事後、堤防の水漏れが問題となっており、水漏れ箇所の発見が急務とされていました。今回の水抜きの結果、水漏れ箇所がわかってきたことは大きな収穫でした(写真⑥)。

●水抜きで判った問題点

わずかに水門を開いて(1.5センチほど)水抜きを始めて、一日後、池底が見えるまで水が抜けましたが、へドロはあまり排出されていないようにも見えました(写真⑦)。勢いよく水を排出するとへドロは抜けるでしょうが、湿地や水路にへドロが溜まってしまおうそれがあります。適正な水抜きの方法や、湿地や水路の保護について、さらに工夫が必要です。問題点は多いもの今後とも試行錯誤していく予定です。

理事 久保 廣晃



⑤排水が湿地へ流れ出ないようにシートを敷く



⑦池の水を抜いた状態

上で説明されているとおり、台峯はこの4月に一部が、また来年4月には全面的な、供用開始となる予定です。保全を求めてトラスト運動を推進してきた当基金の目的は、間もなく、一応達成され

るものと見込まれます。今後もこのままNPO法人として当基金を存続させるか、自然観察や自然保護活動などをどう続けるかなど、追って皆さまのご意見をお伺いすることになりそうです。(編集担当)

.....

鎌倉市の蝶

.....



昨年11月の「集い」でお話し頂いた内容を、ご本人の手で文章に纏めていただきました。

○どうして鎌倉市の蝶の観察を始めたか

私は小さい時から虫に興味を持ち、高校時代の3年間は生物部に入り、虫仲間たちと蝶の採集と観察に明け暮れていました。大学も農学部に応用昆虫を専攻し、卒業後は農業団体に入り農作物を病害虫・雑草から守る防除の指導で全国を飛び回りました。62歳で定年後は蝶の関心が再び高まり、虫仲間と同好会を作り、国内は勿論東南アジア諸国に足を伸ばし楽しんでおりました。

70歳を迎えた2008年に、私の蝶との係わりあいはいかほどいいのかと反省、身近な地元鎌倉市の蝶を調べようと思い立ちました。手始めに鎌倉市の蝶に関する文献を調べましたが、まとまったものはなく、断片的な記録の報告が数件あるだけでした。

○鎌倉市で棲息が確認された蝶は66種

2008年から2017年の10年間鎌倉市内の蝶の観察を続けました。観察方法等は冊子「鎌倉市の蝶」に書いてありますので省略しますが、この10年間で棲息が確

認された蝶は60種でした。この他過去の文献で、記録がありましたが私が10年間で見つけられなかったのは次の6種でした。ミヤマカラスアゲハ、スミナガシ、オオムラサキ、ミヤマセセリ、オオチャバネセセリ、ホソバセセリで、これらを合わせると鎌倉市には66種の蝶が棲息していたことになります。

○何を観察したか＝何が、何処に、何時、どの位いるのか

生物の観察には何が(種類)、何処(場所)、何時(月日)、どの位(数量)いるのかが重要です。それに加えてどのように生活しているかの観察も必要です。

蝶は種類によって、発生状況、例えば年発生回数、越冬形態、食草、棲息場所などが異なっています。それを知って観察すればより詳しく蝶の生態を知ることが出来ます。鎌倉市に棲息している蝶につきまして年発生回数、越冬形態、食草をまとめてみました。

年発生回数

- 年1回(10種):ツマキチョウ、アカシジミ、ミドリシジミ、テングチョウ、ジャノメチョウなど
- 年2回(5種):トラフシジミ、ゴマダラチョウ、コジャノメ、ヒカゲチョウ、キマダラセセリ
- 年3回以上(45種):アゲハチョウ、モンシロチョウ、キタテハ、ヤマトシジミなど

越冬形態

- 成虫(10種):ウラギンシジミ、ムラサキシジミ、キタテハ、ルリタテハ、テングチョウなど
- 蛹(15種):アゲハチョウ科9種、ツマキチョウ、モンシロチョウ、ルリシジミなど
- 幼虫(25種):モンキチョウ、ゴイシシジミ、ベニシジミ、コムスジ、イチモンジチョウなど

- ・卵(6種):アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミズイロオナガシジミ、ミドリシジミなど
- ・明瞭でないもの(4種):アサギマダラ、ウラナシジミ、クロマダラソテツシジミ、クロコノマチョウ

食草

蝶は種類によって餌となる植物(食草)が異なります。

- ・かんきつ類:アゲアチョウ、ナガサキアゲハ、クロアゲハ
- ・アブラナ科植物:モンシロチョウ、スジグロシロチョウ、ツマキチョウ
- ・エノキ:アカボシゴマダラ、ゴマダラチョウ、テングチョウ、オオムラサキ
- ・コナラ、カシワ、クヌギ:アカシジミ、オオミドリシジミ、ミズイロオナガシジミ

〇鎌倉市の蝶の話題

1、「かまくらちょう」とはなにか

関東から中部地方の一部に、大型のチョウを「かまくらちょう」と呼ぶことが古くから知られています。これについて今井彰氏が著書「鎌倉蝶」で詳しく考証しています。それによりますと、「かまくらちょう」と呼ばれている地域をアンケートなどで調べた結果、古くからあった鎌倉街道の上道(群馬の国府から武蔵野原を南北に横断し鎌倉に至る道)に沿ったラインと、富士山の南側の富士宮、伊豆半島あたりに集中しており、関東でも栃木県、茨城県、千葉県では使われていません。そして「かまくらちょう」はどんな蝶を指すのかについては、クロアゲハやカラスアゲハなど大型の黒いアゲハとの答えが多かったそうです。

語源については、今井氏は質実剛健な鎌倉武士の死生観と蝶が象徴される再生、

これが人間の魂に結びついているのではないかとしており、また、鎌倉に多く見られるやぐら(崖などに作られた横穴式墳墓)と関係しているのではないかと推論しています。しかし確証はなく、伝説や伝承に基づく方言・民俗の語源を調べるのには限界があると述べています。私も語源について調べましたが、「かまくらちょう」という言葉を使った資料は見つからず、鎌倉武士に関する歴史書や解説書にもふれられていませんでした。

安西篤子さんの随筆に「鎌倉の私の庭で黒い大型の蝶がしんと静まり返った白昼、花から花へゆったりと飛び回る姿は美しいばかりでなく、どこか魔性が感じられて思わず息を呑む」とありますが、この感覚が「かまくらちょう」の語源に繋がっているのかも知れません。

2、コムラサキの分布拡大



コムラサキは雄の翅表が青く輝く美しい蝶で、神奈川県では山地性の蝶と思われてきました。2000年頃から、相模川や鶴見川に沿って平野部にまで分布が拡大し、横浜市南部や藤沢市にも見られるようになりました。鎌倉市でも食草であるヤナギ類の近くを探索していましたが、2011年に鎌倉中央公園の池の周辺で初めて確認しました。多くは夕方にヤナギの梢を飛んでおり、なかなか降りこず、見掛けることは少ないですが、

ときおりクヌギの樹液に飛来することもあります。

現在は鎌倉中央公園の池周辺に定着しており、今年(2019年)も年3回発生していることが確認されました。



年の8月下旬には成虫の大乱舞がみられました。しかし2016年以降は全く発生が見られず、今年(2019年)も鎌倉中央公園付近では確認されていません。2020年には見られることを期待したいと思います。

3、緑の宝石「ミドリシジミ」

ミドリシジミの雄は翅表が鮮やかなミドリ色の美しい蝶です。食草は湿地に生るハンノキですのでその周辺に棲息しています。かつては関東地方の平野部に広く分布してい

ましたが、ハンノキの自生する湿地が開発などで失われ個体数は減少しています。

鎌倉市では鎌倉中央公園の湿性花園付近、台峰谷戸の池付近、笛田の夫婦が池公園の3ヶ所に棲息していることを確認していますが、個体数は減少気味で保全活動が望まれます。

年1回発生、6月上旬～中旬に多く、雌は8月まで見られることもあります。早朝羽化直後の雄が翅を広げ、朝日を浴びて輝く姿はおもわず息をのむほどの美しさです。

4、幼虫が肉食のさまよえるゴイシジミ

ゴイシジミの幼虫は、タケやササに寄生するアブラムシを食しており、したがってその発生はアブラムシの発生量に左右されます。近年では2014～15年に鎌倉中央公園から台峯にかけ大発生し、特に2014

「鎌倉市の蝶通信」



「鎌倉市の蝶通信」(A4版4ページカラー)を作成しました。季刊で年4回発行予定です。

3月1日発行の2020年春号はまだ余分にありますので、ご希望の方に進呈いたします。下記住所までご連絡ください。電話でも結構です。

〒247-0072

鎌倉市岡本 1241-4 C-911

電話:0467-43-1134

会員 浅野勝司
(文と蝶の写真)

.....
「台峯を歩く会」と関連活動の報告
.....

2019年3月より2020年2月までの「台峯を歩く会」と関連活動の報告を致します。

「歩く会」も本年2月で256回開催いたしました。21年と4か月に成ります。

しかしこの1年間は、「台峯を歩く会」にとって大変厳しい1年に成りました。

- ① 9、10月の2回に渡る大型台風の直撃
- ② 工事の為、谷戸底への立ち入り禁止
- ③ 「歩く会」の担当理事である久保さんの、病氣入院による欠席

等々の条件下での1年間でした。台峯も崖崩れ、土砂崩れによる倒木等で現在も通行できない場所もあります。

しかし散策路の整備も進み、通行可能となっています。また久保理事も元気に復帰され、従来の活動を休むことなく継続しています。会員の皆様の変わらぬご参加と、ご支援ご協力に感謝致しております。

更に報告しておきたいのは、去年は見る事が出来なかった、ヤマアカガエルの卵塊を8塊確認できたことです。ヒキガエルはもう少し後になると思います。堤体工事の真下です。私達が最初に池を掘ったところで。感激です。

<2019年>

3/17 2018年は3/17に開花宣言が出されましたが、2019年は25日頃かと思えます。13日にヒキガエルの産卵を確認しました。観察テーマは、木陰に咲く花 ヒメウズ、タチツボスミレ、キランソウ、ヤマネコノメソウ、ツルカノコソウ

4/21 久保さんは今回も欠席されましたが、

谷戸の池周辺の諸問題について、参加者全員が共通の問題認識を共有する事が出来ました。今年の台峯の桜は全て終了です。それに代わり、春の山野草が満開です。

5/19 今回は「みどりショップ」記念山歩きという事で、感謝の意を込めて開催。閉店して早いもので5年に成ります。今回の観察のテーマは新緑と白い花。ホトギス(鳥)と出会い。シュレーゲルアオガエルとカルガモが出迎えてくれました。

6/16 ホトギスが上空を鳴きながら横切っただけでした。久保さんが元気な姿を見せてくれました。6/13のホタル観察会では約200頭のゲンジが頑張っていました。

7/21 台峯を歩く会は参議院選挙投票日と重なり公会堂使用不可でしたが、実行しました。昨年は6月末には明けていた梅雨も未だに明けず異常気象が続きます。

8/18 当基金の会員でもある浅野勝司さんよりご自身が出版された「鎌倉市の蝶」の記録の説明を受けました。今回の観察テーマは鎌倉らしいチョウ ジャコウアゲハ、アオスジアゲハ

9/15 9月9日鎌倉は大型台風の直撃を受けました。965ヘクトパスカル。崖崩れ、土砂崩れ、倒木等谷戸に入れません。今回の観察のテーマは最近台峯で確認されたミゾゴイ、ヨシノボリについて

10/20 先月を上回る945ヘクト・パスカルの台風の直撃。時間をかけての修復しかない? 今月のテーマ 秋のトンボ ウ

スバキトンボ、アキアカネ

11/17 会員の集い参加要請とカレンダーの販売協力要請 今回の観察テーマ湿地の野鳥 カシラダカ、アオジ

12/15 会員の集い報告=30名の参加を得て盛況でした。観察のテーマ 鎌倉は隠れモミジの里、増えているイロハモミジ イロハカエデ

<2020年>

1/19 谷戸の池水抜き是件役所と交渉中カレンダーの販売報告(予定通り) 台稲荷周辺の樹木(ジュズネノキ、アカガシの大木)周辺のシダ(イノデ、ベニシダ、イタチシダ、オオベニシダ)

2/16 雨天の為、公会堂で参加者全員による「山の手入れの基本的な考え方」についてミーティング。

なお、翌3月は北鎌倉女子学園生徒さんとの、「山歩き」が予定されていましたが、新型肺炎流行のため、3/15の定例分とともに中止となりました。

毎月第3日曜日、9時山之内公会堂集合で「台峯を歩く会」が開催されます。皆様のご参加をお待ちしています。

なお、新型肺炎などで急遽中止の恐れがあります。念のため、基金ホームページ等で開催をご確認ください。

2020/2 望月晶夫(理事)

緑の洞門

2015年4月鎌倉市は安全対策を名目に洞門は通行禁止とされ、同年8月に松尾市長はいったん開削工事の決裁をしました。

以後、「北鎌倉緑の洞門を守る会(北鎌倉史跡研究会)」が結成され、当基金も安全性の確保された工法と現状保全を求め、会と協調し運動を進めています。

2016年7月鎌倉市文化財専門委員会で保存の答申が出されると、市は開削決定を改め、「緑の洞門」を保存する工法へと方針転換する英断を下しました。2019年1月「平成29年度北鎌倉隧道安全対策検討業務委託報告書」が出され、本設工事の3案(①小型自動車を通れる、②緊急自動車を通れる、③人と二輪車を通れる)が示されました。

もともと洞門は人や自転車を通すもので、長年にわたりその様に使われていました。トンネルの口径を広げ自動車が次々通れるようにすることは危険きわまりない事です。人や自転車のみが通れて、車は入って来られない工法こそが、安全を高めることが出来ます。一刻も早い実施を求め、歴史的な遺産として後世に遺すことを切望致します。

理事長 出口 克浩

<かつての姿>



北鎌倉「緑の洞門」Photo 関戸 勇氏

鳥の名前よもやま噺

第六話 キビタキ

私の一番好きな鳥は？と聞かれれば、何と云ってもキビタキと答えます。そのキビタキが鎌倉で五月になると、少し努力すれば見られる鳥になりました。

これは鎌倉の里山の森林化が進んだ証拠だと思います。私が中学生の頃、鎌倉の山は各村落が約 30 位に区画を決め、1 区画づつ 30 年ごとに皆伐して、薪を採り、入会権のある地元の各家に分けられていました。尾根の桜の様に、特別に残される木の外は、全て切られて燃料に利用されていました。台峰で山歩きをしていると、切株からみて、この木が何回も切られ最後の脇枝が今の太木になっている痕が見られます。山を生活の糧とする必要が無くなり、既に 60 年余り放置されています。木は前例がないほど、大きく高く成長し、緑地の面積は激減しましたが、単位当たりの森の体積は増加しています。住宅地のすぐ隣が森林になって、コゲラ、アオゲラなどを自宅の窓から見えるところも増えました。そして 5 月にはキビタキ、オオルリが来るようになりました。しかし喜んでばかりいられません。鎌倉の山は土壌が薄く、斜面の木の樹高が高くなりすぎて、今年の台風では沢山の木が倒れ、がけ崩れがあちこちで発生し、ハイキングコースも、未だに閉鎖になっている箇所が多いのです。キビタキが来たと喜んでるのは、不謹慎なのかも知れません。

さてキビタキの学名は *Ficedula narcissina* (Temminck, 1835) です。



<キビタキ> *Ficedula narcissina*

by Kuribo is licensed under CC BY-SA 3.0, Wikipedia

学名は前回のサシバと同じ形ですから、解説は省略します。

キビタキの命名者 Temminck, 1835 は、おそらく第二話で取り上げたコゲラと同便で、シーボルトが鎖国中の日本から送った標本だと思われます。オランダのライデン自然史博物館長のテミンクが命名しています。ちなみに日本でシーボルト事件が発覚しているのが 1828 年です。

英名の Narcissus Flycatcher は学名に由来すると思われます。

Flycatcher は餌をとる仕草から来たと思われまます。

日本語や英語の形容詞は名詞の前に来ますが、ラテン語の形容詞は形容する名詞の後に来て、形容する名詞の格、性によって語尾変化します。

キビタキにはギリシャ神話に由来する素晴らしい名前が付けられています。ナーシサスとかナルキッソスは自己陶醉症などの意味で日本語化しているので、ご存知の方も多いと思いますが、お話を要約しておきます。

ギリシャ神話の中にはニンペ(Nymph 英語読みではニンフ)という山や森、野や畑に住んでいる妖精たちが登場します。ニンペは

活動記録

(2019年10月～2020年3月)

神ほどではないけれど、若干の神通力を持ち、美しい女性の姿をしています。ナルキッスは美青年中の美青年、ある日、狩りをしているナルキッスをニンペの一人エコー(Echo)が見染め、愛するのですが、ナルキッスは相手にしません。エコーは恋い焦がれ毎日彼を呼び続け、ついに姿が無くなり、声だけ残ってしまいます。ナルキッスは他のニンペ達からも、モテモテで暮らしていましたが、遂に彼に片思いの処女が願を掛けます。「どうか神様、人から愛されるばかりのあのナルキッスが自分の方から恋しいと思う気持ちを起させて下さい。そしてその愛情が決して報われないように」と。復讐の女神はこの願いを聞き入れ。ナルキッスは自分自身しか愛することが出来なくされてしまいました。そして泉の水面に映る自分の姿に恋焦がれ、寝ることも食べる事も忘れ果て、吾とわが面影を見つめながら衰え死んで終わります。死後、魂になっても、三途の川を渡るとき水に映ったわが面影を求めて船から落ちてしまいます。ニンペたちはナルキッスの死んだこと悲しみ、彼が毎日自分の姿を眺めていた泉のほとりに来てみると、そこに美しい花が咲いていた。それが水仙の花だった。というお断です。

フィールドでキビタキの美声を聞き、その美しい姿を見つけようとしても、同じ美声のオオルリが木の梢で囀って容易に見つけられるのに対し、キビタキは樹間で場所を替えながら啼くので、見つけるのに一苦労します。その時には、こちらエコーになった気持ちがしてしまいます。

久保 順三

- 1 市公園課との打合せ、現地立合い等
10/3, 12/26, 2/26
- 2 会員の集い
11/23
- 3 理事会
10/6, 11/3, 11/23, 1/5, 2/2, 3/1
- 4 台峯を歩く会
10/20, 11/17, 12/15, 1/19, 2/16
- 5 山の手入れ
11/16, 12/14, 2/15
- 6 モニタリング
10/6, 11/3, 11/16, 12/14, 1/5, 2/2, 2/15, 3/1
- 7 北鎌倉女子学園生徒を台峯に案内
中止

編集後記

春うらら。台峯も満開の桜の下、子供たちが明るく無邪気に遊んでいます。この情景を愛でる私の頭に、半世紀も前の高校時代の国語のテストが浮かんできました。“四字熟語「□□爛漫」を埋めなさい”というのですが、こう答えた奴がいましたっけ、今の私の気持ちも同じですが。(答えは下に)

正会員の皆さまへ <総会の予告>

今年も総会を5月に開催の予定です。

当基金の今後について話し合う大事な会となりそうです。ぜひお越しください。

但し、新型コロナウイルスの影響もあり、後日お送りする正式なご案内状を必ずご覧ください。

【答】×「桜花」×「天真」○「美酒」、ただ呑みたくなった次第

台峯の周辺 ⑱

Hさんのこと

勤め先で、永らく使われぬ机の抽斗の底に敷かれた古新聞紙に「ユリカモメの飛行術」の一文を見つけた(当時総理府発行のタブロイド判広報紙「今週の日本」1992年1月20日号)。「野鳥十話」シリーズの第6回ようだ。

相模湾のユリカモメが夕方相模川河口を飛び立って西へ向かうのに、天気の良い日は群れで輪を描き竜巻のような渦を作って上昇していく。しかし風の強い日は全く異なり、翼を力強く羽ばたいて波すれすれに散開、移動する。天候に応じた飛翔の見事さに書き手のH氏は感服している。



<ユリカモメ>

Larus ridibundus by Gerry Lynch is licensed under CC-AS 3.0.Wikipedia

ところで、私事ながら筆者が中学に入った今から半世紀も昔のこと、通学の電車には同じ中高の生徒が多い。中にその年の生徒会長がいた。中1から見ると、高2とは仰ぎ見る立派な大人である。しかも千人もの全校生徒の代表とあっては。そんな上級生が、いつしか新入生の顔を見知った上で、「君は本田君というのか。よし、覚えた！」と声を掛けて呉れた時は嬉しかったものである。

このH先輩は品行方正・学術優等だが、ガリ勉ではなく、生物部キャプテンとしても活躍。シロヘリハンミョウの調査に部員と三浦半島海岸線を一周した夏もあったと聞く。

また高1時の小論文が校内誌に掲載さ

れたが、意外にも生物ではなく、人名のアクセントについての研究であった。三音節を例に考えると、動詞には「進む」(ススム)や「譲る」(ユズル)のように平板に発音するものや「実る」(ミノル)や「勝る」(マサル)等の起伏型があるが、これが名前に成ると平板型動詞からの「進」(ススム)などは勿論、起伏型も「実」(ミノル)や「勝」(マサル)のように平板となる。他方、名詞からでは、平板型の「真」(マコト)も起伏型の「緑」(ミドリ)も元のアクセントが保持されたまま人名と成る。形容詞、形容動詞では、、

聡明な読者諸氏はどうに勘づかれているかもしれないが、H氏とH先輩とは同じ人物である。鳥に昆虫、更には人名と対象は様々でも、科学的な思考は同様ということなのか。永年平塚市立博物館の学芸員を務め、放課後の中高生らを博物館に引き寄せることに成功する館長ともなった、また日本野鳥の会神奈川支部長にして、後の神奈川大学教授の浜口哲一氏、その人である。

当基金のモニタリング作業に繋がる『生きもの地図が語る街の自然』や『生きもの地図をつくろう』(いずれも岩波書店)など著作は多く、また大分昔だが、市の「広報かまくら」にやはり野鳥の連載をしていたこともある。

高校を卒業されたあとは接点がなく、名前もお忘れだろうが、近年里山に関わることになった筆者としては一度お話を伺いたいと願っていた。が、その前に故人になられて、永遠に機会を失ってしまった。それも、この5月で10年になる。今頃は天国で天使の翼を研究されているのかもしれない。本田 隆史